



渋沢栄一から大久保一翁への手紙

渋沢栄一の若い頃からの代表的な社会的貢献事業として『養育院』関係のものがしばしば上げられる。しかし、その設立に関しては、渋沢自身はその講演の中で関与を否定している。

これらの事業は大久保一翁が明治五十七年の東京府知事の時代に、共有金(江戸期の救貧資金である**七分積金**の名前を変えたもの)を原資としてなされたものであり、幕府目付け時代から暖めていた構想の実現である。

また、『商法講習所』は、森有礼、ホイットニーの構想によるものであり、その破綻を防ぐために大久保府知事が共有金をあてたものであり、当初このことにも渋沢は反対している。しかし、大久保一翁東京府知事が、共有金(七分積金)の運用を渋沢に委託したことから、渋沢はこれらの社会事業に関与するようになる。

渋沢の関与は、大蔵大輔・井上馨の内諭により、本来、江戸の救貧対策基金である七分積金の名を「共有金」に改め、町会所の運用を東京の新興財閥などによりなる營繕会議所に託し、財政難の折、東京のインフラ整備やガス灯街路設置にも使用できるようにしたことにある。

これに対して、救貧策はどうするのですかと大久保知事により諮問が出され、その答申の「救貧三策」を具体化するものとして、明治五年に**養育院**は設立されたのである。

この関係は、静岡藩に割り当てられた太政官札の運用を渋沢に託し、これをもとに静岡の商法会所を立あげて成功させた先例にさかのぼる。

その信頼の醸成に、以下に挙げる手紙がある。二人の絆のきっかけとなった、若いパリ帰りの渋沢と、静岡の徳川藩の中枢を支える大久保の二人をつなぐ手紙がこれである。

手紙の背景: 大久保忠寛(一翁) 1817~

鳥羽伏見戦争後、徳川慶喜は江戸に戻り、恭順体制のための組閣を行い、会計総裁に大久保一翁、陸軍総裁に勝海舟、海軍総裁に和田堀を当て、江戸幕府の幕引きにあてた。この時老中は不在で、大久保は本来大名の職である若年寄・参政に引き上げられており、幕府の政権移管時の実務担当最高責任者である。

この後、静岡における徳川藩(家達)の移封に働き、家臣団による沼津兵学校、静岡学問所、駿府藩立病院などを立ち上げに奔走。旧藩士救済に茶生産の基礎を作っている。また、慶喜家の家令を努めているが、この時(明治元年(1870)12月)に渋沢が訪れるのである。

明治3年静岡藩権大参事 更に廃藩置県により、静岡県家達と共に東京に戻っている。なお、明治3年に明治政府参議を要請されたが辞退。

手紙の背景: 渋沢栄一 1840~

埼玉の豪農の跡継ぎであったが、政治運動に関わり、縁あって一ツ橋藩に仕官し、武士身分を得た。慶喜が徳川將軍になるに及んで、凶らずも幕臣となる。徳川昭武を首班とするパリ万博派遣団、万博後の昭武のヨーロッパ巡検、パリ留学の庶務、会計担当官として働く。

幕府崩壊により、徳川昭武と共に帰国し、その報告に静岡で謹慎中の徳川慶喜を訪れる。家令の大久保が間に立つが、このときが二人の初めての出会いである。

渋沢は、静岡の慶喜の下にあることを希望し、ヨーロッパでの幕府預かり金の運用で得た資金の使い道を担当者相談するが埒が明かず、静岡藩の要路の浅野次郎八、大久保一翁に当たったのがこの手紙である。

大久保がその公正さに渋沢を高く評価する気かけになったと思われる。なおこのころ栄一は篤三郎を名乗っている。

渋沢栄一と大久保一翁間の手紙

渋沢栄一と大久保一翁との関係を考えてみると、相当のやり取りが想定されるが、それを求めて、大久保一翁の直系のご子孫を訪ねた。

見せていただいた多くの資料の中に、3通の渋沢の手紙を見出した。その一つがこの書状である。もう1通は営繕会議所の始末にかかわる、他の1通は抄紙会社にアメリカ人技師を雇い入れる際の許可をもとめたものである。

これらは、写真に収められ、東京都公文書館で閲覧可能な状態にいただいた。

また判読困難な文字を、公文書館の西木氏に読んでいただいた。

元の手紙、西木氏により活字化したもの、これを現代文に稲松が意識したものを掲げた、三種を比較していただきたい。

逆に大久保が渋沢にあてたものが想定されるが、渋沢は徳川家関係の大量の資料を兜町の旧邸宅に集めていたものに含まれていた可能性が高い。

しかし、これらは、関東大震災の時に灰燼に帰しており、残念なことである。

大久保家文書

大久保家の直系ご子孫のもとにいくつかの文書が残されていた。令心形刀令流目録、辞令類、家譜、大総督府から江戸の治安維持を依頼する沙汰書、松平春嶽・横井小楠・中根雪江・大久保利通・川路利・福沢諭吉らの書簡、木戸孝允あての手紙の写し、勝海舟の軸、薩英戦闘図、ハリスの登城図、個人的なメモなど・・・これらの写真は東京都公文書館で閲覧可能な状態になった。

大久保一翁の関係文書

大久保一翁関係の文書には、亡くなったときに勝海舟が集め私家版の歌集として発行した「櫻園集」、国立図書館に収められているもの、海舟全集に収められているもの、松平春嶽関係の文書、松坂の射和文庫所蔵のものなどが現存している。他にもある筈であるが未見である。

江戸時代のものは、江戸開城時、関係者に墨が及ぶことを危惧して、一翁自身が多数焼却したと伝えられている。

一輪俸呈仕候、爾来以外御疎音申上候、愈御清穆御奉職御坐被成奉遙賀候、蘆笙

無異勤仕罷在候、乍憚御省念可被下候、偕一

昨年来度々申上置候元民部公子仏国

滞在中旅館諸道具売私代

其外ニもフロリヘラルトより受取戻之儀

当五月中同人より同国商人シベリオン

横浜本店へ為替を以金子渡方

申来候ニ付、シヘリオンへ再々引合および候処

別紙手続書之通成行を以漸

受取方相済候、此度右為替方ニ付

仏国公使より申談も有之、直様右

金子分配いたし御遣方相成候ては万々一

之節差支も可相生哉之趣ニ候、其

所以は右為替金仕掛之筋ニ付、若

即今仏国も戦争等ニ付フロリヘラルト

退転御帰之變異等有之、右為替債却可相成節ハ一旦

為替会社へハ小生より返却致候筋に

可相成との事ニ候、就ては水戸藩へ

御分割ニも相成候ハ、尚以右等之異

変差起り候節容易に債解

難相成儀ニ被存候ニ付、凡往返五ヶ月

間小子御預り申置、何方なりとも

極厳肅の方へ預置候方可然と

存、當地御用局へも申談候処至

極尤之筋との申聞ニ付、右様取計

申度、乍去小生之愚考ハ唯

万一を懸念いたし候予備策迄

にて、敢て勞を焦り功を競ふ

之意念ニハ無之候得共、兎角右様

之事ハ他之嫌疑を生し易き

事ニ候間、更ニ御良考も御坐候ハ、

御教示被下度候、將又右請取

方相成候ニ付仏国公使其外へ挨拶、

振出輸送品及向後右金子分

割方ハ夫々見込取調差上候間

篤と御懇考被下御高案

御指揮奉希候、依て別紙

書類添此段仰高裁候也、
勿々頓首謹言

庚午八月二日 渋澤篤三郎

浅野次郎八様
大久保一翁様

再白、右金子之儀ニ付ては是迄平岡

四郎小栗尚三へも度々申談ノ儀も

有之候ニ付、此度も手続申送候間御談

合之上早々御下知被下度候、

乍末毫辰下酷暑之候折角

御撰養專一二奉存候、本年之風雨

順序頗る暑氣強く豊作と

存候処、過日来度々之暴風

雨にて諸方洪水之趣、併昨年に

比し候ハ、稍相悖り可申哉、何分は当

年之豊穰企望之至ニ御坐候、

(超現代語訳 稲松)

ご無沙汰いたしておりますが、不躰ながら、お手紙を差し上げます。ますますお元気に、ご公務に励んでいるようにお見受けし、喜ばしい限りです。

小生は相も変らぬ様子ですが、はばかりながら、お考えいただきたいことがあります。

一昨年から度々申上げてきました、元民部公子がフランスに滞在中の宿舍の道具の売却代金、その外に、フロリヘラルドから受け取った戻し金(配当金)は、五月中にフランス商人シヘリオンの横浜本店に為替で振り込まれております。

シヘリオンにたびたび問い合わせ、別紙の手続き書のように暫定的に受け取りました。

この度フランス公使も言ってきましたように、お金の分配に万一差し支えがあるかもしれません。その訳は、若し今フランスが戦争をすることになると、フロリヘラルトは帰国してしまい、この為替の仕組みからいつて、この為替の扱いが一旦為替会社に返してしまう事になります。

ついては、このような異変が起こってしまい、簡単には現金化しにくくなり、水戸藩に分割することが難しくなるように思います。

そのため約五ヶ月間私が現金化して預かり、その後、何れかの最善の割合で配分したほうがよいのではないのでしょうか。

当地静岡の担当局に申し入れましたところ、それ

も尤もだということ、このように取り扱いたいと思います。

しかし、私の愚考するところに寄れば、万が一のことを心配して、予備の方法としてこのようにいたしました。あえて、面倒を避けてさつさとけりをつけたいわけでは在りません。

兎角このようなことは、あれこれ他人からの嫌疑を受けやすいので、もっとよい考えがあれば、お教えください。

また、受け取ってしまっておりますので、フランス公使などへの挨拶、送られてきた輸送品や、右の金子の分割方法の見込みを提案いたします。

そのための書類を添付いたしますので、ご判断ください。恐れながら申し上げる次第です。

庚午(明治三年)八月二日 渋沢篤三郎(栄一)

浅野次郎八様(家老)

大久保一翁様(中老)

追伸

このお金のことについては、これまで、平岡四郎、小栗尚三にも度々申し入れてきましたので、相談のうえ、早々にご指示願います。

最後ながら、聊か酷暑の季節ですのでお体大切にしてください。今年のお天気具合は大変暑く、豊作のようです。しかし、先日来暴風雨で、あちこち洪水もあり、昨年に比べますと心配なところもあり、今年の豊饒を願っております。



静岡市の宝台院にある徳川慶喜謹慎の地の碑
詳細は櫻園通信 28号参照

当時の幕府の外国派遣団や留学生は、資金の使用が、いい加減であったが、渋沢の態度は公正無私かつ正確で、彼への信頼が一気に高まった。

当時静岡藩は、明治政府から割り当てられた50万両の太政官札の貸付金の運用法を模索していた。これに対する渋沢の商法会所立ち上げ建言が採用され、先のパリから持ち帰ったお金、豪商からの資金を合わせて(合本)して、静岡商法会所を立ち上げた、日本的な会社組織のはじめとされている。因みに、商法会所の元手となる資金の90%以上はこの太政官札である。